

KOTONONE
Series of Stories
vol.14

お母さんから、ベビーカーを右手で受け取ると、ヒョイッと片手で持ち上げた。そのままトランクへ。その間、ずーっとここに、笑顔、笑顔。「子どもは大好きなんですよ」と言いながら、後部座席へ母子を案内する。確認して扉を閉めたら、さあ、出発。運転する姿を後ろから見ると、ハンドルを回すのに右手しか使っていないのがわかる。ハンドルにはノブのような器具がついていて、その器具を

片手で
ハンドルを握る

握ることで、片手でもスムーズにハンドルを回せる。運転自体は実になめらかで、片手で運転しているとは思えない。国本正文さんは五四歳。タクシー運転手として働いて、もう九年になる。二〇〇六年に、二種免許を取得した。タクシー運転手になったのは、国本さんが障害者になってからのことだ。

熱中症から
くも膜下出血を発症

「今でも鮮明に覚えています。二〇〇〇年の八月二〇日のことでした」。当時国本さんは、昼間は電気工事、夜



シリーズ 障害者の就労事例 14
タクシー運転手の星

くも膜下出血で倒れ、障害の残った国本正文さんは、一家の大黒柱として家族を養えない、もどかしい時間を過ごした後で、タクシー運転手という「天職」に出会った。障害のあるなしに関係なく、タクシー会社「ひまわり交通」のエースとして活躍する国本さんに、話を伺った。

編集部=文
text by Kotonone
信澤邦彦=写真
photograph by Kunihiko Nobusawa

は高速道路のジョイント工事と、二つの仕事をかけもちしていた。睡眠時間は二時間ほど。そんな状態が一〇日ほど続いていた。「親父が経営していた電気工事会社をやめてから、二年間くらい、請負仕事だけで生計を立てていたんです。不安定な身分です。来た仕事は断れなかった」。ちょうどPHSの普及期で、仕事には事欠かなかったというが、五歳を筆頭に二人の子どもを抱えていた国本さん、仕事はいくらあってもよかった。「ある日、熱中症にかかってしまったんです。体がしびれてしまっただけです。今日は夜の仕事の方は休む、と女房に伝えて、寝ようとしたんですけど、しびれが収まらない。何か話そうと思ったら、ろれつが回らない。これはまずい、と、すぐ救急車を呼んだ。わたしの記憶はそこまです。そのままだ、救急車の中で国本さんは意識不明になった。

退院までは
半年かかった

意識を取り戻したのは、一カ月後のこと。脳動脈奇形破裂による、くも膜下出血。熱中症で血液濃度が上がって、血液が詰まったことが原因だ。このま



片手ハンドルで
売上はトップクラス

教えてくれた先輩からは「お前、タクシー向いてるよ」と言われたそうだ。困ったことは、車いすやスーツケースなど、重たい荷物を持たなければならぬこと。倒れる前は、体力に自信もあつて、力もあつた。でも倒れてからは、片手しか使えず、なかなか持ち上がらない。体全体を使うようにすると持ち上がるが、慣れるまでは苦労した。コミュニケーションは、どうでしたが、と聞く。「言語障害だけど、ゆっくりしゃべったら、通じるんです」。お客様とは、行先を確認するくらいで、一言二言のやりとり。だから大半の人は、国本さんに麻痺があるとは気づかないという。「ときどきは『運転手さん、左手どうしたの』、つてお聞きになるお客様がいらっしやいますね。そんなときは、『倒れてしまつて、身体障害者なんです。すみません』と説明します。するとほとんどの方は『ああ、いいいいよ』つておっしゃってくださいます。不安に思ってお客さんですか？一人だけいらつしやいました。「運転手さん、それで大丈夫なのか？』つて、『大丈夫ですよ。もう五年やつてますから、不安でしたら、ほかの車をお呼びしましょうか』とお伝えし



ま意識が戻らず、寝たきりになつてしまふかもしれないと、家族は告げられた。意識を取り戻すことができたのは、四カ月前に生まれたばかりの末娘と、国本さんが倒れる四年前に亡くなった弟のおかげかな、と言う。「娘を残して死ねないし、弟には『またうちに来るのは早いよ』つて言われたような気がしてね」。

三カ月間、川崎市立川崎病院に入院し、その後、厚木市の七沢温泉にある神奈川県総合リハビリテーションセンターに転院した。「ようやくしゃべれるようになったのは、リハビリテーションセンターのこと。それまでは片言でした。意識は、はつきりしているんですよ。話を聞く分には、なんともない。でも、言葉を返そうと思うと、頭が混乱するもどかしかったですね」。

左半身には麻痺が残った。「左手は動かないまま。なんとか杖をつきながら歩けるように」まではなりました」。

時給一〇〇円では
家族を養えない

退院してからは、地元の日鋼管病院に毎日のように通つてリハビリに励ん

だ。担当医に、時間を持て余しているなら、と、近所の作業所を紹介された。訪ねると、送迎の運転手もやつてくれないかと頼まれた。「工事の仕事で車はよく運転してましたし、周辺の道にも詳しくはありましたから」。日中は、主にピーズをついたり、手漕ぎのはがきをついたりといった作業をし、朝夕は、利用者の送迎バスの運転をした。「そりや、何もしいよりはいいですよ。でも時給一〇〇円だったんですよ。とてもじゃないけど、家族を食わせていくことはできない」。『恥ずかしい話ですけれど』と国本さんは、当時は生活保護を受けながら生活していたと話す。「わたしは働けなかつたです。女房は女房で、まだ小さい子どもがいて、外で働くわけにはいかない。迷惑をかけました。やりくりも苦労しただろうと思ひます」と振り返る。

就職説明会で見つけた
タクシーの仕事

そんな日々を過ごしていたある日、国本さんに、就職合同説明会に参加しないかとの話が来た。「僕は、ソコンもできないですから、どうしようかなと思つた

んですが、運転手だったらなんとかできるんじゃないかな、と思つて参加しました」。行つてみたら、たまたまタクシーの運転手を募集していた。採用が決まったのは、一カ月後のこと。「明日から採用するから」と言われ、そこから「種免許を取得することになった。『実技は楽にパスできたんですけど、学科には苦労しました』。言語障害が残っているため、読み書きがスムーズにできない。『四〇五回落ちたかな。最後は暗記です。問題の種類つて、だいたい決まっているじゃないですか。一〇種類ほど、暗記ですよ。たまたま丸暗記した部分が出てきたので受かりました。涙が出ましたね。これでやつと家族を食わしていただける、つて」。

ようやく
家族を食わせていける

はじめてみると、タクシーの仕事は、国本さんに向いていた。「電気屋が長かつたんで、道にはまあまあ詳しくなつたんです。電柱が作業現場でしたから、番地までよく覚えていました」。はじめやすく、研修期間としては考えられないような金額の売上を上げた。乗務を



**お客様から
励まされることもある**

があつて。国本さんのような方って、まだまだいらつしやると思うんですけど、なんでチャレンジしてこないのかな、って思っています。はじめから募集していない、働けないと思ひ込んでいるのではないか、その誤解を解きたくて、ホームページでお知らせしているんです」と言う。

「タクシーは孤独な仕事ですけど、やつているうちに仲間もできます。僕は左手が使えないけど、足が不自由な人もいます。聴覚障害で補聴器をしている運転手もいるし、見た目にはわからないけど、人工透析をしている人もいます」と国本さん。

今日も、さまざまな障害を抱えた、国本さんのような「運転手の星」たちが、お互い、見守りながら、励ましあいながら、それぞれ頑張っている。



たら、「いいいよいよ、乗せてくれ」ってそれくらいですかね。」

お客様から励まされることもあると云う。「片手運転だから、気づく方は気づくんですよ。『脳梗塞?』って聞かれて、『くも膜下ですよ』って言うと、『がんばりな』って励ましてくれたりとか。」

**「せっかち」だから
工夫する**

ひまわり交通株式会社で営業課長をつとめる小林裕希さんは「日勤の運転手さんの中では、一、二を争う売上じゃないでしょうか。夜勤を含めても、トップクラスだと思います」と国本さんを評価する。「明るい性格がいんですよ。嫌味がない。だからこちらも、年下なんですけど遠慮なくいろいろ言える。ほかの人だと遠慮しちゃうんですよ。年齢が高くてこの仕事をはじめた人の中には、こちらがアドバイスや指示をすると、むくれちゃう人もいます。国本さんは、懐が広い。それより何より、やっぱり『自分がやらなきゃいけない』っていう気持ちが一歩強くないですか。すると国本さ

ん、ちよつと照れて『せっかちなんですよ。せっかちな方が、タクシー運転手に向いているんですよ。すかさず小林さん『せっかちっていうか、なんか負けず嫌いだよね、国本さん。売上は自分が一番じゃないや嫌だ、みたいな』と返す。国本さんとの掛け合は、年齢の差を感じさせない。国本さんは「タクシー運転手というのは、おとりしてたら売上をよそに持つていかれちゃうんですよ。だからせっかちの方がいい。あとは、無駄な動きをしないこと。自分で必要がないと思ったことはやらないし、売上を上げるために必要だと思ったことだけをやる」と言う。たとえば、A地点からB地点に移動するのに、一番距離の短いルートで行くのか、それともお客さんがいそうなところを通りながら遠回りして行くのか。朝や夕方、忙しくて黙っていてもお客さんがつかまる時間帯は、最短距離で駅などの待機場所に向かう。そうではない時間帯には、お客さんがいそうな場所を通る。「せっかちだから工夫するんですよ」と国本さん。運転席に収まってしまうえば、障害のあるなしは関係ない。売上だけの勝負。そこがいい、と笑う。

**七〇歳になっても
乗り続けたい**

今は朝六時から夕方五時半の勤務。「夜勤はやりません。お酒が好きですから(笑)」と国本さん。晩酌は欠かさない。「だって、血圧が高くて倒れたんじゃないんだから。倒れる前から血圧は正常値でした。今も多少は上がりましたが、まだまだ大丈夫。」

倒れたときは小さかった二人のお子さんも、今では長女が二〇歳、真ん中の長男が一八歳、次女が一五歳と大きくなった。くも膜下出血の後遺障害を抱えながら、二人を立派に育て上げた。でも「できれば体が動かなくなるまではやるつもりですよ。だってヒマですから(笑)。使ってくれるなら、七〇歳過ぎても、やるつもりです」とまだまだ意気盛んだ。

ひまわり交通では、国本さんのように障害があつても運転手として働ける人を募集していて、ホームページ上でも積極的に告知している。小林さんは「単純に人が足りないということもありま